

CBRC Newsletter

<http://www.cbrc.jp>

SPRING
11
2005

和のバイオインフォマティクスのすゝめ



藤渕 航

Wataru FUJIBUCHI

配列解析チーム
研究員

明治以来、文明開化の下で欧米に新しい技術や文化を求める様になってから百数十年の歳月が流れた今なお、日本は未だにこのモードから脱皮できない感があるのは私だけでしょうか。欧米では宮崎アニメや武道など、日本の文化が賞賛されているという近年の状況にも関わらず、ともすれば盲目的とも言える「文明開化主義」に陥ってしまう姿には、自己反省が必要かも知れません。

各方面の方々の多大なご尽力により、バイオ・IT 融合研究棟が完成し、いよいよ本格的に優秀な頭脳を集めるためのセンターが稼働し始めました。しかし、本当に大変なのはこれからだと言う気がしてなりません。私の脳裏には、なぜ日本があれだけ

熱心に欧米の技術を取り入れておきながら、一度は帝国主義時代に、そして再び経済大国時代に失墜したのか、がよぎってなりません。今でも親しいNIH留学時代の友人に「日本は他人のものをちょっとだけ変えたものを出すのが得意だ」と皮肉まじりに言われたことが思い出されます。

もちろん、加工術に長けた日本人には、既存技術の改良は最も易い目標かも知れません。しかし、グローバリゼーションが進んだ今、世界の研究所で研究者や技術者の流動が容易な時代です。すぐに真似ができるような目標では、いずれ別の誰かに取って代わられるのが落ちです。バイオインフォマティクスの世界で、当センターが本当に揺るぎない地位を獲得するには何を

しないといけないのかを、これから議論を重ね、冷静に判断する必要があります。

歴史を振り返ると、文明開化の嵐の時代に、岡倉天心が西洋と東洋を巧みに織り混ぜ、最終的にボストン美術館での東洋美術の地位を確立したことは有名です。また、パスウェイの研究で有名になられた金久實先生は、日本でのみ出版された代謝反応の学術書を有効に利用されたそうです。ここに、我々のバイオインフォマティクスに必要なものの大きなヒントが隠されている様な気がしてなりません。真の目標を樹立し、そしてそれを遂行することが要求される、そんなことが許されるセンターを作り上げることに少しでも貢献できることを期待してやみません。